様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2017
課題番号：２５７８０３２３

研究課題名（和文）ナショナリズムと「文明的」自己像形成をめぐる現象の比較・歴史社会学的考察

研究課題名（英文）A sociological analysis on the theme of 'nationalism and the phenomena surrounding the formation of a "civilised" self-image'

研究代表者
竹内　里欧（TAKEUCHI, RIO）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：４０５６６３９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「ナショナリズムと『文明的』自己像形成をめぐる現象」というテーマについて、社会学的考察を行った。特に、これまでの研究をふまえ、近現代日本社会におけるナショナリズムやアイデンティティのあり方の歴史的・文化的特徴を、「文明化」を象徴する理想的な自己像形成にまつわる現象を研究することにより、比較社会学的視点を含みつつ明らかにすることが目的であった。E. W.サイードのオリエンタリズム概念にかんする理論的検討、「文明化」とナショナリズムにかんする具体的現象についての社会学的検討、その他、社会学理論や社会学的研究にかんする検討の3つが主たる研究成果である。

研究成果の概要（英文）：This study is a sociological analysis on the theme of ‘nationalism and the phenomena surrounding the formation of a “civilised” self-image’. The main objective was to elucidate the historical and cultural aspects of nationalism and identity in modern and contemporary Japanese society. To this end, previous research was reviewed and the phenomena surrounding the formation of an ideal self-image that symbolises ‘civilisation’ were analysed, partly through a comparative sociological perspective. The main outcomes from the study were as follows: (1) a theoretical review of the concept of orientalism propounded by E. W. Said; (2) a sociological examination of the specific phenomena regarding ‘civilisation’ and nationalism and (3) a review of sociological theories and sociological research.

研究分野：社会学

キーワード：文明化　近代日本　西洋化　ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

私は、これまで、N. エリアスによる「文明化」とナショナリズムにかんする理論を参照しつつ、近代日本における「文明化」を象徴する理想的人間像と日本の近代化・西洋化過程との関係について経験的研究を進めてきた。博士後期課程では、戦前の礼儀作法書における「文明化」を象徴する理想的人間像に関する言説の通時的変容を論じた修士論文をさらに進展させてゆくとともに、近代日本における「紳士（ジェントルマンシップ）」をめぐる言説の有した諸特徴とナショナリズムの関係をテーマに、この主題に取り組んだ。例えば、「civilized」「fair」などの普遍的とされる価値観や概念が「ジェントルマン理想」と深い関係にあるように、「文明化」を象徴する理想的人間像の形成のプロセスの考察は、ある社会が「文明」に対してどのような価値観をいだいていたかを考える上で重要な試みとなる。そのようなことから、本研究では、「文明」を象徴する理想的人間像の形成・変容に具体的焦点をあてつつ、「ナショナリズムと『文明化』」にかんする現象について、近現代日本社会を中心に社会学的考察を行うことを目的とした。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの研究をふまえ、近現代日本社会におけるナショナリズムやアイデンティティのあり方の歴史的・文化的特徴を、「文明化」を象徴する理想的な自己像形成にまつわる現象を研究することにより、比較社会学的視点を含みつつ明らかにすることを目的とした。理論的には、N. エリアス、E.W.サイード、A.ケミライネン等を参照した。

3. 研究の方法

具体的には、以下のような作業(3（1）、3（2）)を行った。

3（1）「ナショナリズムと『文明化』にかんする現象」を分析する上で必要となる理論の検討。

A.ケミライネン、N.エリアスらのナショナリズムや「文明化」にかんする理論を精読し、また、E. W.サイードのオリエンタリズム理論について検討を行った（4（1）等参照）。

3（2）「『文明化』とナショナリズム」にかんする現象についての具体的分析。

近現代日本社会における「ナショナリズムと『文明化』をめぐる現象」について以下のような分析（①～③）を行った。

① 新渡戸稲造の生涯や著作（特に「文明化」を象徴する理想的な自己イメージ形成にまつわる言説）を素材に、「文明化」とナショナリズムの関係について検討した（4（2）①等参照）。

② 「文明的」・先進的モデルとされるフィンランド教育像の日本社会での受容の様相や、その受容が日本社会の自己像形成に与えた影響について分析を行った（4（2）②等参照）。

③ 近代日本の都市新中間層における、西洋的な価値観や文化、「文明的」な理想像の構築・普及において大きな影響力のあった、佐々木邦の小説を資料に検討を行った（4（2）③等参照）。

4. 研究成果

本研究を行う期間において、産前産後の休暇及び育児休業の取得により、一時的に研究を中断した。育休後、体調不良により、当初の予定どおりに研究をすすめることが困難であり、苦労したが、作業の不足分は、図書館の相互利用制度やデータベースを活用するなど、研究手法を工夫するようつとめた。今後よりいっそう努力したいと考えている。

主たる研究成果について、以下3つの項目に分

けて記述する。

4（1）「ナショナリズムと『文明化』にかんする現象」を研究する上で必要となる理論に関係する分析。

・西村大志他編、竹内里欧他執筆、『映画は社会学する』、法律文化社、2016年(竹内は、「オリエンタリズム」の章（p.197-207）を単独で執筆)。・・・
E.W.サイードのオリエンタリズム概念について先行研究を参照しつつ、理論的に検討し、自己像や他者像の構築のメカニズムとそれがはらむ問題について検討を行った。

4（2）「『文明化』とナショナリズム」にかんする具体的現象」についての分析。

4（2）① 新渡戸稲造の生涯や著作（特に「文明化」を象徴する理想的な自己イメージ形成にまつわる言説）を素材に、「文明化」とナショナリズムの関係について検討したもの。

・竹内里欧、「Paradox of Subjectivization: Modern Japanese Intellectual Elite's Reaction to the Image of the West」『椙山女学園大学研究論集（社会科学篇）』、第45号、2014年、p. 13-25。【英語】・・・
新渡戸稲造の生涯や著作（特に「文明化」を象徴する理想的な自己イメージ形成にまつわる言説）を代表例としつつ、西洋化とナショナリズムという二つの使命を背負った近代日本の知識人が主体化する過程にどのようなパラドクスが存在したかを考察した。明治維新以来、高度経済成長期頃まで、近代化と文明化を象徴する「西洋」という表象は、近代日本の知識人にとって、両義的なモデルであり続けた。論文では、それらの知識人が近代化というプロジェクトを遂行するために、いかにして「西洋」という表象を利用したか、またそこにはどんな陥穽があったかということを、分析した。英語で執筆した。

4（2）② 「文明的」・先進的モデルとされるフィンランド教育像の日本社会での受容や影響について検討したもの。

・佐藤卓己編、竹内里欧他執筆、『岩波講座現代 第8巻 学習する社会の明日』、岩波書店、2016年(竹内は、「『近代主義の残像』としてのフィンランド教育ブーム」の章(p.71-99)を単独で執筆)。・・・
「文明的」・先進的モデルとされるフィンランド教育像の日本社会での受容についてフィンランドの資料も交えて分析を行った。論文では、比較社会学的視点から、「文明的」モデルとしての北欧像が日本社会の自己像形成に与えた影響についても考察した。その結果、欧米に対する幻想が崩れる中で、「学力」「能力」の転換と関係しつつ、先進的・「文明的」でオルタナティブな理想像として、フィンランド教育モデルが必要とされてきた社会的背景について明らかになった。

・竹内里欧、「ポスト近代社会に残る近代主義の『痕跡』――フィンランド教育ブームにみる――」アジア親密圏/公共圏教育研究センターによる公開セミナー「2016年度第1回 親密圏／公共圏セミナー」(於京都大学)、2016年6月29日。
・・・
先述の著書（佐藤卓己編、竹内里欧他執筆、『岩波講座現代 第8巻 学習する社会の明日』、岩波書店、2016年(竹内は、「『近代主義の残像』としてのフィンランド教育ブーム」の章(p.71-99)を単独で執筆)。）の内容をもとに、フィンランド社会を鏡に日本社会の「文明」への憧れについて教育現象を素材に分析した。

4（2）③ 近代日本の都市新中間層における、西洋的な価値観や文化、「文明的」な理想像の構築・普及にかんして検討したもの。

・稲垣恭子、 竹内里欧（ゲストとして）、「第2回 子どもと大人の関係をどうみるか」「第4回 変容する家族の物語」(2017年度放送大学「教育文化の社会学（'17）」（稲垣恭子）にゲスト講師として参加)、修士課程学生対象（共同）、2017年。・・・
放送大学講義のゲストとして、「第2回」「第4回」で講義を行った。この内容は、次の論文（竹内里欧、「佐々木邦と『ユーモア小説』――都市新中間層のハビトゥスと『抵抗』戦術――」（『新・教職教養シリーズ 2020 第12巻 社会と教育』、協同出版、近刊））のもとになった。

・稲垣恭子他編、竹内里欧他執筆、『新・教職教養シリーズ 2020 第 12 巻 社会と教育』、協同出版、近刊（竹内は、「佐々木邦と『ユーモア小説』――都市新中間層のハビトゥスと『抵抗』戦術――」の章を単独で執筆）。・・・
昭和初期を中心に活躍し、「西洋」への憧れを喚起し、「文明的」・「合理的」な価値観や近代日本社会における「紳士（ジェントルマンシップ）」という理想像の普及において影響力をもった小説家佐々木邦についての分析。特に、近代日本の都市新中間層において、西洋的な価値観や文化、ライフスタイルの流布、そして「文明的」な理想像の構築・普及がいかに起こったかに注目しつつ考察を行った。

4（3）その他、社会学理論や社会学研究にかんする分析等

・＜セミナーでの報告集＞京都大学人文科学研究所 共同研究「日本・アジアにおける差異の表象」A Japan-based Global Study of Racial Representations 編『Nikkei Studies and Beyond: Dialogue between Scholars in Japan and the U.S.』、2013 年
（竹内は、担当部分（P. 37）を単独で執筆。タイトルなし。）・・・
国際セミナーでの報告集。

・＜事典項目執筆＞神崎宣武他編、竹内里欧他執筆、『日本文化事典』、丸善出版、2016年（竹内は、「塾」の項目（p. 358-9）を単独で執筆）。・・・
近代日本の教育をめぐる現象にかんする項目執筆。

・＜事典項目執筆＞日本教育社会学会編、竹内里欧他執筆、『教育社会学事典』、丸善出版、2018 年（竹内は、「第Ⅲ部 教育社会学の研究領域」「第1章 社会化と人間形成」「子どもの発見」（p. 272－3）を単独で執筆）。・・・
アリエス等の理論にかんする項目執筆。

・＜コラム執筆＞工藤保則他編、『＜オトコの育児＞の社会学――家族をめぐる喜びととまどい――』、ミネルヴァ書房、2016 年（竹内は、「育児をめぐる『物語』」のコラム（p.82-3）を単独で執筆）。・・・
家族社会学にかんする内容のコラム。

・＜パネリスト＞竹内里欧（パネリストとしてコメント及び討論、「文化社会学から読む」を担当）、「メディア文化論公開ワークショップ1 『加藤秀俊『メディアの展開』と京都大学の教育文化メディア研究』」、2015 年 11 月 10 日、於京都大学教育学部。・・・
講演のパネリスト。文化社会学的視点からコメント及び討論。

・＜パネリスト＞竹内里欧（パネリストとしてコメント及び討論）、「『人生の社会学』は可能か――生活史と他者理解――」（講演者 立命館大学 岸政彦先生）、2018 年 1 月 22 日、於京都大学教育学部。・・・
講演のパネリスト。社会学的研究の方法についての検討等。

以上の研究成果の内、今後の研究にとって特

に重要と考えるのは、4⑵③に記したものである。研究の過程で、「文明的」な理想的人間像の誕生と変容については、知識人やエリート、ハイ・カルチャーに焦点をあてた分析だけではなく、戦後日本社会のライフスタイルや価値観、文化の原型を形成するにあたって重要な役割を担った大正・昭和初期都市新中間層に焦点をあてた分析も重要であると考えるにいたった。このテーマや問題関心は、今後の研究に引き継いでいく予定である。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
・竹内里欧、「Paradox of Subjectivization: Modern Japanese Intellectual Elite's Reaction to the Image of the West」『椙山女学園大学研究論集（社会科学篇）』、 第45号、p. 13-25、2014年。【英語】

〔学会発表〕（計　3　件）
・竹内里欧（パネリストとしてコメント及び討論）、「『人生の社会学』は可能か――生活史と他者理解――」（講演者　立命館大学岸政彦先生）、2018 年 1 月 22 日、於京都大学教育学部。

・竹内里欧、「ポスト近代社会に残る近代主義の『痕跡』――フィンランド教育ブームにみる――」アジア親密圏/公共圏教育研究センターによる公開セミナー「2016 年度第1回 親密圏／公共圏セミナー」(於京都大学) 、2016 年 6 月 29 日。

・竹内里欧（パネリストとしてコメント及び討論、「文化社会学から読む」を担当）、「メディア文化論公開ワークショップ1　『加藤秀俊『メディアの展開』と京都大学の教育文化メディア研究』」、2015 年 11 月 10 日、於京都大学教育学部。

〔図書〕（計　6　件）
・稲垣恭子他編、竹内里欧他執筆、『新・教職教養シリーズ2020　第12巻　社会と教育』、協同出版、近刊（竹内は、「佐々木邦と『ユーモア小説』――都市新中間層のハビトゥスと『抵抗』戦術――」の章を単独で執筆）。

・日本教育社会学会編、竹内里欧他執筆、『教育社会学事典』、丸善出版、2018年（竹内は、「第Ⅲ部　教育社会学の研究領域」「第1章　社会化と人間形成」「子どもの発見」（p. 272－3）を単独で執筆）。

・佐藤卓己編、 竹内里欧他執筆、『岩波講座現代　第8巻　学習する社会の明日』、 岩波書店、2016年(竹内は、「『近代主義の残像』としてのフィンランド教育ブーム」の章(p.71-99)を単独で執筆)。

・工藤保則他編、『＜オトコの育児＞の社会学――家族をめぐる喜びととまどい――』、ミネルヴァ書房、2016年（竹内は、「育児をめぐる『物語』」のコラム（p.82-3）を単独で執筆）。

・西村大志他編、 竹内里欧他執筆、 『映画は社会学する』、 法律文化社、 2016年(竹内は、「オリエンタリズム」の章（p.197-207）を単独で執筆)。

・神崎宣武他編、竹内里欧他執筆、『日本文化事典』、丸善出版、2016年（竹内は、「塾」の項目（p. 358-9）を単独で執筆）。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
・稲垣恭子、 竹内里欧（ゲストとして）、「第2回 子どもと大人の関係をどうみるか」「第4回 変容する家族の物語」(2017年度放送大学「教育文化の社会学（’17）」（稲垣恭子）にゲスト講師として参加)、修士課程学生対象（共同）、2017年。

6．研究組織
(1)研究代表者
竹内 里欧 （TAKEUCHI, Rio）
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号： 40566395
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし
(4)研究協力者
なし